



※ 報 會 樹 葉 針 ※

通 卷 第 八 十 七 號

南九州の山旅

A R A

今年の夏は大阪方まで打揃って、兎にも角にも上高地へ集る約束をして居った所、會社の用で七月中旬から又ぞろ支那へ出張し、折角の山行もフィになつてしまった。九月に入ると、例の價格引上禁止令やら圓域輸出調整法やらで會社中ごつた返しの騒ぎだが、強引に休暇を取つて豫てカンちゃんから送つて貰つた地圖と案内書を持つて、門司を飛び出した。行先は南九州と決めてはゐたものゝ、西から廻るか東から廻るかはその日の氣任かせとしてゐた所、山日記のない事に氣付き、福岡迄貰ひに出たので西廻りと決めて、序に大牟田の惡口ばかり云つてゐる近ちゃんのを慰問して、鹿兒島に着いたのが九月廿三日であつた。

附焼刃だが、此の邊の地理的説明をすれば、鹿兒島灣は昔は南北に走る平行した二本の斷層があり、その中央部が沈落して出來たもので、霧島、櫻島、開聞等はその地溝内又はその延長線上に噴出した火山である。説明せられてゐたが、近來は、櫻島の如き一つの中央火山丘とする、一大カルデラの内部である。説明せられてゐる。之が正しいとすると、九州には阿蘇の外に之に比敵すべき大きなカルデラが、霧島並に開聞岳を夫々中央火口丘とするカルデラと合し、四つも存在する事になるが、南九州を歩いて見ると兎に角火山の素晴らしいのには驚くの外はない。

南九州の山旅と題は大きく出たが、開聞岳、櫻島、霧島山群と代表的なのを三つ歩いた丈だから、事新らしく書く程の事もないのだが、カンちゃんとの約束もあり、之をネタにその責を果す次第である。

一、開 聞 岳

成層火山の上に塊狀火山の重なつた、コニトロイテ式火山さかいふ圓錐

形の美しい此の山は、九州の最南端、海岸から急激に聳え立ち頂上附近では五十度に近い傾斜があり、上からのぞいた所は垂直に海に落ちて居るかと思はるゝばかりである。

登山路は麓の十町及び川尻から二本あり、殆んど山を一周するばかりの螺旋形の道で、頂上九四二米に達してゐる。

非常に良い道で、下駄履きで二時間半もあればゆつくりである。殆んど頂上迄道は林の中なので見晴しは少ないが、谷川の音に代る波の音を聞きながら、涼しい潮風に吹かれて歩くのは又變つた味があつて面白い。

頂上は灌木に蔽はれ、直径一二〇米位淺く窪んでゐる。海に向へば硫黄島、屋久島、種子島、陸に向へば櫻島、高隈山、佐多岬遠くは霧島山と南九州絶好の見晴台である。

山名はカイモンダケと讀まず、ヒラキ、ダケと讀むべきだとの説もあるが、一般にはカイモンダケと呼ばれてゐる。十町には牧^{ヒラ}開神社と言ふのがある。

下山は川尻に下つて開聞温泉（海岸に共同風呂が一軒ある粗末なものだが）で一風呂浴び川尻廻り山川行のバスで歸るも、又は十町に下つて枕崎迄バス、枕崎から汽車で鹿兒島に出るも良し、何れにしても鹿兒島から日歸り旅として良いコースである。開聞岳東西の海岸線の美しさは勿論、枕崎、山川等の古い魚港情緒等ゆつくり伊豆廻りの様な旅をするのも悪くないと思つた。

二、櫻島

ボン／＼蒸汽の様な船で、武の部落の登山口に下ろされたのが九時。鹿兒島の港から約一時間である。六時の一番船で渡る豫定

が、その頃迄ひどい雨が降つて居たので八時の二番船に遅らしたのである。此の山こそ波打際からだから、正味一、一一八米登る譯である。それでも頂上迄約三時間、山道に掛る迄は岐れ道毎に石の標柱が建てゝてある。有名な大根を見たいものと畑に氣を付けて歩いたが、時期の早かつた故か見られなかつた。蜜柑と枇杷が非常に多い。火山の常として道は雨水で剥れて居るので、風通しも見通しも悪く、夏など定めし暑い事と思つた。頂上迄二、三ヶ所開けてゐて、その都度見える霧島の連山は實に美しかつた。十一時頃から晴れ上り、相當に汗を絞られたが、此の道の下りは非常に樂で上りの不愉快さを埋め合せて呉れる。

頂上は御岳（北岳）、中岳、南岳、の三峯から成り登り付きが御岳で最高點がある。大正三年の爆發は南岳で今尚憤煙を擧げ、白黒黄で縞取つた代赭色の凄い火口壁と、中岳、北岳の砂丘を思はす様な和さは面白い對照をなしてゐる。

開聞岳と共に登山道には何處にも水がない。

三、霧島

霧島山とは、北は韓國岳（土着の人はカンコツダケとも云ふ）から赤崩（地圖の獅子戸岳）新燃中岳を経て南、高千穂峯迄を總稱して云ふのであつて、各山頂には皆火山趾を持ち、又は美しい火山湖を作つてゐる。湖は非常に豊富であり、所謂霧島四十八池と稱せられてゐる所であり、山頂から點々と見える湖の眺めは一寸他では見られぬ珍しい景色である。

登山路は何れも立派で指導標も十分、大概は緩かな草付尾根で快適なコースである。櫻島は丁度盆石の中の山の感じで、美しい

さ云ふよりは寧ろ可愛らしい感じである。櫻島の左には秀麗富士型の開闢岳、更に左にはどつしりした高隈連山を眺めながらの緩かな草付尾根の漫步は、敢てミヤマキリシマの花時ならずとも、一度は歩く価値のある道である。

特に新燃から中岳の間が良い。中岳から望み見る高千穂峯は、太郎平から見た薬師岳を思はせるものがあり、昨年の薬師行きが懐しく思ひ出されて嬉しかった。

高千穂峯は常時登山者が多く、霊峯の感じがびつたりこない。但し峯守が何時もゴミを拾つてゐるので、山頂が割合に綺麗なのは氣持が良かった。

秩父宮記念碑の所で勤務奉仕隊に依り廣場が作られ、又温泉迄の道も、途中澤に下る所迄巾二十尺位の大道路に改修されてゐるが、温泉迄之が完成しバスでも通る様になれば非常に便利ではあるが、尙一、二年は掛ると思はれた。そうなれば益俗化はするであらうが、こゝまで来てゐるんだから一層の事便利になつた方が却て良いかも知れない。

—(昭和十四・十)—

瀧谷第四尾根の登攀(十二月)

山 田 亮 三

北穂高の頂上近くに幕營して瀧谷第四尾根の完登を目指した今冬の計畫は、十年來さか云ふ好天氣に恵まれて、目的を達し得たのみでなく、第四の外、第二、第三、第五の各尾根の登攀に成功し、私達としても昨年一昨年の怨を一擧に晴らし得た次第でした以下は最大の目標であつた第四尾根登攀の一つの覺書です。

昭和十四年十二月二十三日、佐藤と根本が早くから起きて支度

して呉れた雑煮を腹一パイ食つて、大塚さんと二人、天幕を飛出したのは頂度五時半だつた。頭の上は素晴らしい星空だが、奥穂や涸澤岳のあたりにいやな雲が掛つて、或は四日も續いた天氣が今日あたりから崩れるのじやないかと云ふ氣もする。月の落ちた暗い稜線を懷中電燈の光で歩き、昨日の偵察通り第二尾根へ下りにかゝる。暗い内にCルンゼ左俣を下り、第一コルで夜明けを待つ豫定だつた。ところがザイルを付けて下りにかゝると直ぐに、二人共相前後して懷中電燈を落して了つた。不注意だつたかも知れない。柄の所に細引を付けて胸に縛つて置いたのだが、電池を入れる爲に二つに割る後の棒だけを残して落ちて了つたのである。數日の快晴と強風に、アイゼンのツアツケが僅に入る程度の堅雪のルンゼを、燈なしで下る事は出来ない。止むなく第二尾根のリッジに引返し、明るくなる迄待つ事にする。何さ云ひ様のない暗い氣分だつた。今日のアタックは駄目になるかも知れない。否冬山に不可欠な電燈を落して了つては、今冬の計畫全部が駄目になるのじやないか、其んな氣持さへして来るのだつた。

しかし、兎も角行ける處迄行つて、偵察だけでもして来ようと沈み勝な心を引立て、夜明けと共に立上つた。左俣は途中二箇所程瀧があるが、大した事もなく右俣との合流點に下り着く。幾たびが夢みた嚴冬の第四尾根の姿を、此時初めて振り仰いだのである。

豫想外に雪の付き方は少なかつた。案外樂に行けるのじやないか、ふつと其んな考が胸に浮ぶ。それに隆々たる筋骨を盛上げた様な逞しい岩稜を仰いで、何うして此儘引下る事が出来やう。今ま

での重い氣分も何時しか一掃されて、強い登行の意慾が湧上つて来るのだつた。「行かう」「登つちやばう」二人は同時にさう叫んでゐた。

第一コル着七時半、大塚、山田のオーダーでトップが動き初めたのは同五十分だつた、リッジ通り少し登り、秋の偵察通りCルンゼ側に巻き込みに登つて行く。夏場は何の事もない所だが、ホルドが氷雪に閉される今は思ひもかけぬ悪場と變つてゐる。トップのステップ・カットの勞力も大きかつた。リッジへ出る途中一箇所ひどく悪く、ハーケンを打ち、細引をたらし、あぶみを用してやつと乗越す。

天氣は大して良くは無いが、急激に悪化するとも思はれない。それに風の無いのが何よりも有難かつた。

リッジへ出て了ふとBカンテ迄大した悪場はない。ホルドの良い岩稜に快適な登攀を續けてBカンテ下へ着く。此處は二枚の疊を屋根形に組合せ約四十度の傾斜で立掛けた様な形をなし、ホルドの殆ど得られぬ悪場である。秋には腕と膝のフリクシヨンで辛じて登つたのであるが、Cルンゼ側に一面に氷の張りつめた今は摩擦も利かず、薄氷にきはいどいステップを刻み、一本のハーケンに全身をかけて登らねばならぬ。トップの技倆を信じてはゐても其のきはいどい動作に、ジッヘルしつゝ、幾度かはくした事だらう。Bカンテを越すとあさは平凡な雪稜が第二コル迄續いてゐる。コル着十一時五十五分ナイフの刀の様に細いリッジをならして一腹する。取付から約四時間、豫定通りだつた。此處からいよ／＼ツルムの登りである。嘗て早稻田の人達が登つた時、ツルム

の頭迄九時間半を要した、第四尾根中の最難所なのだ。

空身になつて大塚さんがCカンテに取付く。

傾斜は急だが雪のつき方は少い。小さなホルドを利用する爲トップは遂に素手となる。打込んだハーケンに足をかけ、ツアツケが一本しか掛からぬホルドにたよつて、トップの苦闘は續く二段になつたカンテの下段はリッジ通し登り上段はCルンゼ側を登る。出口が案外悪く時間をとる。トップが登り切つたのは一時間の後だつた。

此處から見上るガリーは見るからに陰惨だが、ステップさへ刻めば樂に行けさうだ。しかし實際に取付いて見て、其の悪いのに驚かざるを得なかつた。スル／＼と調子良く伸びて行つたザイルが急に止り、「悪いぞ」と、聲がかかる。メル／＼の氷にステップを刻み、堅雪にうもれたホルドをさぐるのは樂ではないらしい。それでも最初の一ピッチは良かつた。次のピッチ――ツルムの肩へ出るピッチはひどく悪かつた。傾斜は猛烈に急だし、ホルドは殆ど無い。ハーケンは次々と打込まれ、其の都度ザイルは一寸二寸と伸びて行く。

登路を切開いて行くトップも樂ではないが、ジッヘルしてゐるラストも辛い。足はしん／＼としてみて来るし、手指は棒の様になる。トップの落す雪を頭からかぶつて體は段々と冷えて来る。時々思ひ出した様に「悠つくり行け」さか「慎重」にさか叫んで見る。しかし、其れはトップを勵すさ云ふよりは寧ろ、やゝもすれば焦燥の氣に駆られやすい自分自身を落着かせ、鈍らうとする闘志を振起さうとするものであつたのかも知れない。三十分、一時

間、一時間半、時間は遠慮なく過ぎ去つて行く。かぶり氣味の岩を左に避けて、持つてゐたハーケンを打ちつくした頃「登つたぞ」と云ふ元氣な聲が聞えて來た。二人が登り切つたのは四時過ぎだつた。第二コルから約七十米、四時間を要してゐる。もう夕暮が近かつた。急がねばならない。ビグアークの用意はして來たが、ツルムに登り切らねば腰をおろすべき場所とて無い。しかし此處から上は前程悪くなく、ザイルの伸びも極めて良かつた。只正にツルムの頭に出やうとする最後の五米は悪かつた。秋に打つて置いたハーケンの耳にビツケルの先端を引掛けて體をのし上げたりする。最後のスラブの薄氷を、きはどいバランスで左へトラヴァーすればもうツルムの頭だつた。午後五時半、陰鬱な北穂飛驒側のリッジもガリも既に宵闇の中に包み込まれようとしてゐる。電燈の無い私達は、此上登攀を續ける事は出來ない。ツルムの頭に適當な場所を見つけビグアークをする事にする。ザイルをはずし、衣類を着込んでスッホリツェルトをかぶつた。ローソクをつけ、煙草に火を點けると、朝からの緊張からやつと解放され、落付いた氣分が戻つて來る。残つたパンを食ひ終れば、もう明日の夜明けを待つだけだ。時間のたつのが驚く程遅い。寒さと寂しさをまぎらはす爲、大聲で歌をうたつて見る。安曇節を知つてゐるだけやつて見ても、二十分程しか経たぬのにはがっかりした。

ツェルトの内部はバリ／＼と氷が張り、まるで氷洞の中に居る様だ。外では暮れ方崩れかゝつた天候も再び回復して素晴らしい月夜となつた。ツェルトの隙間からふと覗いた月光の瀧谷の景觀其れは夢幻とも神秘さも云ひ様のないものだつた。

「一體此れが日本の山なのだらうか!」

午前三時、テルモスのコ、アを飲む。あゝ熱いお茶を腹一パイ飲みたいものだ。腰から下がひどく冷へて來るので、兩手で膝をバタ／＼と叩く。四時になるともう夜明けが近いと云ふ考へが私達を勵まして呉れる。惜しみ／＼使つて來たローソクも遂に無くなつて了つた。しかしやがて夜明けだつた。悠つくり準備し、再びアンザイレンして出發したのは九時に近かつた。もう此處から上は以前程の悪場は無い。クラツクを抜けるのに手古摺つた以外は順調に進む。Dカンテの下からDルンゼ側に雪の斜面をトラヴァースし、左上に登り切ると登攀は終りとなる。

嬉しかつた。いや助かつたと云ふ感じの方が大きかつたかも知れない。今日も素晴らしい快晴だが、もし昨晩から天候が激變して、吹雪にでもなつたら何うなつた事だらう。此上なく恵まれ、た天候に感謝せねばならなかつた。

ザイルを外し、堅雪に一步一步ステップを刻んで國境線に出ると天幕がもう目の前に見える。「ヤッホー」と叫ぶと、天幕の二人も出て來て大聲で叫んでゐる。縦走路は案外悪さうなので涸澤側に下り、荷上げのラツセルにしたがつて天幕へ登る。一時に氣がゆるみ、疲勞がドツと襲ひかゝつて來た。

佐藤がテルモスにコ、アをつめて途中迄迎へに來て呉れ、天幕へ歸ると根本が美味しい飯の用意をしてゐて呉れた。

其夜、計畫成就の喜びに、天幕は夜晩く迄にぎやかだつた。

(一九四〇・一)

森脇芳之君よりの便り

望月兄 御無沙汰致して居ります。御元氣に御勤めの事と思つて居ります。小生去る十一月一日無事盛岡の士官學校に入校致しました。他事ながら御休心下さい。盛岡では既に毎朝眞白に霜が降り、紅葉の終らんとしてゐる校庭の西北には、新雪を僅かに戴いた岩手の山が、昔を思ひ出させてゐます。此處で八ヶ月ミツチリ野戦小隊長と成る可く訓練されるのだそうです。又冬山のシーズンが來ますね。盛岡へ來て幾日も経たぬのに、早や二回もスキ一の夢を見ました。若し正月に休暇が出たら必ず行きます。

(昭和十四年十一月四日附 望月宛)

御葉書拜見、何と云つても山友達からの頼りが一番良いです。先日岩手の山頂に掛つてゐた新雪は今では消えて、毎日空風が吹いてゐます。學校の前は原っぱになつてゐて其の境を知りません。習志野と下志津が一緒に成つた様な物です。今に此處が狭く成る程教練が始まる事の事です。兵隊に出る様でしたら充分山へ登つてから……。(十一月十二日附 望月宛)

其後如何ですか。皆様御變りありませんか。小生元氣で訓練を受けてゐます。盛岡は一面の雪原で、校門の所を馬橋が通つてゐます。雪は楽しかつた昔の山行をあれこれ思ひ出させます。針葉樹會報出來ましたら此處へ送つて呉れませんか。此の廿九日には休暇が出るので一寸御目に掛れるかも知れません。何卒御體大切に。(十二月十七日附 望月宛)

盛岡陸軍豫備士官學校生徒隊機關銃中隊

第四區隊第十班 森 脇 芳 之

新羅二郎君よりの便り

御無沙汰致シマシタ。其後如何デスカ。愈々師走モ半バトナリ忙シイ事デセウ。コチラモ知ラメ間ニ全ク冬ラシクナリ、枯木ニ烏ナド澤山トマツテルノチ見ルト、ソハロニ内地ノ事ナド思ヒ出シマスネ。去ル十月半バニ惡性ノ「腸チブス」ニ取り付カレテ入院チ命セラレ、以後今日ニ到ル迄白衣ノ生活チ送ツテル次第デス。相當ヒドカッタノデスが幸ヒ一命チ取りトメ、今デハ全ク元氣チ回復シ退院モ間近ニ迫リマシタ。異國デ獨リ病氣ニナル事ハ淋シイ事デス。余程心掛ガヨクナカツタンデセウ。

又コレカラ大イニ活躍シマスカラ御安心下サイ。針葉樹會ノ皆様ニモヨロシク。(昭和十四年十二月十二日附 望月宛)

中支派遣軍齋藤(彌)部隊佐々木部隊次田隊

新 羅 二 郎

山岳部報告 (一九三九・一〇)

登 行 記 録

(1) 塩見、白峯、鳳凰縦走(一〇、一六一、二〇) 宮城 深谷 清水 佐野

豫期せぬ新雪の美觀を満喫する、さすが寒かつた。

(2) 駒ヶ岳裾を巡りて瑞牆、木賊越え(一〇、一六一、二二) 高野 關岡

豫定は駒、仙丈であつたが身體を悪くして變更、甚だ残念であつたが、紅葉は美しかつた。

(3) 涸澤生活(一〇、一六一、二〇) 大塚 山田 佐藤 根本 小柳

今冬瀧谷登攀に備へての偵察竝荷上を行つた。

珍しく一片の雪も無く黒々とした岩は却つて夏よりは美味がある、しかしグリセードが出来ぬのでガラ／＼下りには全く閉口した。第四尾根、竝に北尾根をやつたのみで下山。入山の日遙關西から來られた小谷部スケさんに出會ひ御馳走になつた。

(4) 乗鞍岳(一〇、一七一〇) 久保
身體の調子悪く不愉快な登行であつた。

(5) 穂高小舎生活(一〇、二〇一、二四) 船本 日江井

涸澤班より後れたが徳澤であふ。小舎は非常な混雑で重太郎ホク／＼。雪は奥穂の頂上附近を染める程度であつたが寒氣は厳しく廿二日は八時零下十度に下る。慣れぬせいか相當にこたへた。後立山、劔は眞白に冬の衣を着てゐる。ジャン及瀧谷第二尾根をP₂まで下降したのみ。新設の涸澤小舎は小ジシマリした小舎だから來年夏は相當混雑するであらう。

(6) 美ヶ原(一〇、二二一、二三) 小柳

人一人として居ない美ヶ原に一人天幕を張つて見たが寒さはお話にならぬ、しかし夏の様に人が澤山居ないのが取柄。

(7) 殺生小舎生活(一〇、二二一、二四) 山田

穂高小舎生活班と本谷で分れて一人でガラ／＼を登つたが案外氣持良き所、小舎では色々な人種に出會つて少しも淋しくはなかつた。寒氣厳し。

槍東面、北鎌尾根、小槍等に登る。

部 誌

○秋山報告會 十月卅日 於本科 出席者 本科五名、豫科十名

手製のフカシ芋に舌鼓をうち乍ら秋の收穫を語つた。

記 録

○雲取山縦走

吉 澤 一 郎

十月二十一日(土)午後〇時半の汽車で上野を出、例のケーブルで三峰神社に登り社務所に一泊。之は會社の秋季旅行でこゝまでは同勢男女取交ぜ三十一人。

二十二日(日)は二派に分れ、一隊は奥ノ院から太陽寺へ下つて元の道を戻る。一隊は白岩、雲取を経て七ツ石、鷹ノ巢を辿り氷川へ出る。私は又此の縦走班のリーダーを仰せつかる。御参考までに記録を左に御目に掛けて置かふ。

神社(六、一五)―雲取小屋(一一、〇五一、一二、〇〇)―雲取山(〇、二五―三五)―氷川(六、三〇)途中で暗くなり電燈の御厄介になつた。氷川からバスで御岳へ、昔を思へば随分便利になつたものである。

○蓼科山(十一月五日)

増 山 清 太 郎

茅野―親湯―蓼科山―大河原峠―三反田

この山は、この前白根赤石を十日も歩いた後に登つたので、高尾山くらゐにしか感じなかつたが、今度來てみると、随分長い登りである。十時四十五分の夜行で出て、頂上は十一時、三反田には六時すぎになつてしまつた。

天氣が良いので、南北アルプスを始め、周圍の山々の眺めもよく、麓の高原氣分も面白かつた。特に大河原峠の佐久側は美しい。蓼科の圓峯を顧みつゝ笹原に椴松の疎林から、何時の間に

か落葉松の密林に移るのも、また千曲川の谷を隔て、望む淺間荒船、兩神の眺めも極めて印象的である。去年登った御座山が隠れてゐるのは惜しかったが。

○刈寄山(十一月五日)

林 俊 介

秋晴れの軽いハイキング。これから大いに又山に行く豫定。

○扇山(十一月十二日)

望 月 達 夫

鳥澤から登つて、別路を又鳥澤へ下る。物凄しい秋晴れに恵まれて頂上にねころび、遠く近くの山々、谷々を眺め曾つての山行を思ひ出してゐた。

○大菩薩峠(十一月二十六日)

望 月 達 夫

南アルプスだけ雲にかくれてゐたが秩父、ハツは全くくつきりと冬近き空に姿を現はしてゐた。嶺から妙見邊りの烈風は猛烈。日川の谷合ひで焚火をし砥山峠から下る。木賊山、茅ヶ岳、西毛無山の姿が印象に残つた。

○最上高湯(一月一日―三日)

増 山 清 太 郎

勤先の連中を率ゐてのスキー行である。一日は高湯ゲレンデで滑り、二日にはガスの中を夏道コースを三寶荒神の肩へ行つて藏王小屋まで引返した處、急に快晴になつたので、あさ一時間も早く晴れて呉れたら熊野岳まで行けたものをさ口惜しがつた。その中に一時間足らずで再びガスに包まれてしまつたので、この前来たとき、僅かの晴天に誤覺化されて頂上に立ち、歸り路が判らなくて難澁した事を想出した。實に無軌道なのが藏王の天候である。夕方から太平スロープを下つた。三日には吹雪の中を夏道コースを登つて、獨鈷沼コース(別名電線コース)を

下つた。

藏王も、こんなに澤山の固有名詞を並べなければならぬほどひらけてしまつた。しかも高湯始まつて以來の人出だといふが信越方面に比べたら物の數でもなく、汽車も座席が空いてゐる始末である。山形には積雪なく、高湯から上は例年より多く、質もよい。三日間快走することが出来た。十二月には神樂峯で快走したし(この方は孫さんから報告があるだらう)今冬のスキー運は上々吉といふ處。

消 息

常盤敏太教授 (住所) 杉並區天沼二丁目四五番地

山口稔一君 (新住所) 板橋區中新井町二丁目八三一番地

丸茂平造君 舊臘十二月三日中込敏子様と御結婚さる。

高見 要君 (勤務先變更) 株式會社東京石川島造船所經理課

(新住所) 淀橋區戸塚町三ノ九〇一(電・牛込四四五〇)

覺張泰三君 (通信先) 仙台市山本部隊及川隊第三內務班

柿原謙一君 (通信先) 王子區袋町阿部部隊經理室

和田榮達君 (新住所) 兵庫縣武庫郡御影町西平野御影莊內

鷺崎雄四郎君 (住所) 北海道夕張郡夕張町字大夕張三菱鑛業

啓心寮

編輯後記

新らしいカットは、例によつて渡邊九郎氏の御手を煩はしたものです。今シーズンの冬山やスキーのニュース等、どしどし御送り下さいますよう御願ひします。